Translating and Retelling Irish Fairy Tales: Through the Comparison of Two Japanese Translations with Three English Versions of “The Legend of Nockgrafton”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): fairy-tale, Irish Gaelic, translation or retelling, story-telling, oral tradition 作成者: KAMIMURA, Tomoka メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4097

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

アイルランドの昔話「ノックグラフトンの伝説[1]（*The Legend of Nockgrafton*）」の曜日の歌について
―石井桃子訳、井村君江訳、Yeats 版、Jacobs 版、Croker 版の比較検討―

児童学部　児童学科　神村　朋佳

要旨：アイルランドの昔話「ノックグラフトンの伝説（*The Legend of Nockgrafton*）」におけるアイルランド語の歌について、日本語訳に初歩的な誤りが見られたこと、二種の日本語訳書で歌詞に揺れが見られたことから、石井桃子訳、井村君江訳と、二訳書の原書とみなされる Jacobs、Yeats、Croker の英語原書三種を比較検討した。その結果、アイルランド語に関する語釈の誤りは、英語圏に最初にこの話を紹介したと目される Croker 版の本文および注記に起因しており、それが後続の編著者、翻訳者によって、修正されることなく踏襲されてきた可能性が高いと推測できた。また、このことから、アイルランドの昔話の英語、日本語への翻訳、紹介、その受容の諸相における様々な問題点が浮かび上がってきた。そこで文献資料のみならず、音声資料も含めた資料の収集と比較検討を進め、子どもに語るにふさわしい、正確でよりよい翻訳、再話の可能性を追求したい。

キーワード：昔話、アイルランド語、翻訳・再話、語り、口承

1. はじめに

石井桃子編訳『イギリスとアイルランドの昔話』（福音館書店）は、昔話の語り、ストーリーテリング（story-telling）を志す者にとっては基本図書であり、初心者がまず手に取る必読書の一つでもある。また、イギリスの昔話はともかくとして、アイルランドの昔話については、日本における翻訳紹介がそれほど多くない上に、子どもに語れるもの、子どもでも読めるものとなるとさらに希少である。長きにわたり、日本の読者に、アイルランドの昔話にふれる貴重な機会を提供してきた功績には多大なものがあるといってよいだろう。

この昔話集に所収のアイルランドの昔話「ノックグラフトンの昔話」（以後、石井訳とする）は、日本ではおなじみの「こぶとり」と酷似した話として比較的よく知られているかもしれない。日本の昔話の「ほっぺたのこぶ」が「背中のこぶ」に、また、「鬼」が「妖精」に、「踊り」が「歌」にと、彼我でモティーフの異同はあるが、物語の構造やプロットは基本的に同一のものといえよう。

妖精たちが一週間の曜日をただ順番に唱えるだけの単調な歌を唄っていると、そこへ、こぶのある男が来て、妖精の歌に曜日を付け足して唄うというふうに話は展開する。その歌詞が、石井訳では、アイルランド語を片仮名で音写したものに日本語を添えて示されているのだが、筆者は、このアイルランド語の片仮名表記部分と日本語の訳語とで曜日がずれているのではないかと気づき、かねてより確認の必要を感じていた。

当初は、軽微な語訳、誤植の類いであろうと想像して、井村君江訳『ケルト妖精物語』に所収の「ノックグラフトンの伝説」（以後、井村訳とする）を参照したところ、この二書で、歌詞（唱えられる曜日）が異なっていること、それにも関わらず、やはりまったく同工の誤り（アイルランド語の曜日と日本語の曜日が合っていない）が含まれていることが分かった。なぜ、この二書で歌詞（唱えられる曜日）が異なるのか、どちらが正しいのか、あるいはどちらも正しいのか。異なる原書から訳されており、唱えられる言葉が異なる二書に、なぜ同工の誤りが見られるのか、このような初歩的にすぎる誤りが正されることなく、二訳書が長年にわたり版を重ねてきたのはなぜなのだろうかといった疑問がさらに生じることとなった。

そこで、アイルランドの昔話「ノックグラフトンの伝説（*The Legend of Nockgrafton*）」について、石井、井村による二訳書とその原書とみなすことのできる英語版三点を比較検討することとした。検証の結果、これらの誤りは原書に由来することが確認できたが、

未解明の点も残り、新たな論点や課題も浮かび上がってきた。本稿では、その経緯について報告するとともに、アイルランドの昔話の英語や日本語での翻訳紹介にまつわる諸事情とその問題点を指摘し、論点や課題を提起しつつ、より正確で、子どもに読み聞かせ、語るにふさわしい翻訳、再話の可能性を探るための一助としたい。

今回、比較検討したのは以下の五種のテキストである[2]。

①石井訳「ノックグラフトンの昔話」
石井桃子編訳『イギリスとアイルランドの昔話』福音館書店（福音館文庫）初版 2002 年、第 2 刷 2005 年。

②井村訳「ノックグラフトンの伝説」
W. B. イェイツ編、井村君江編訳『ケルト妖精物語』ちくま書房（ちくま文庫）第一刷 1986 年、1990 第 11 刷。

③Jacobs 版
More Celtic fairy tales. by Jacobs, Joseph, New York: Putnam: 1895.

④Yeats 版
Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry. Edited and Selected by W.B. Yeats.. New York: The Walter Scott Publishing Co., Ltd. London and Felling-on-tyne.

⑤Croker 版
Fairy Legends and Traditions of the South of Ireland. by T. Crofton Croker. A New Edition. Philadelphia: Lea and Blanchard. 1844.

これらの各版について、その関係を整理しておくと、①石井訳は③Jacobs 版を元にしており[3]、④Yeats 版を訳したものが②井村訳である。また、③Jacobs 版と④Yeats 版はともに、⑤Croker 版を典拠としていることが明示されている。

図 1　諸版成立の過程とその関係

石井桃子の児童文学分野における訳業は、質量の両面で高く評価されてきた。石井が亡くなって学問的評価の対象としやすくなり、没後の回顧、生誕百周年の顕彰の動きが続いたことで、再評価が急速に進みつつある[4]。Jacobs は昔話の紹介、再話において、質の面では様々な批判もあったとはいえ、第一人者であったことは疑い得ない。井村君江は日本における妖精学の泰斗であり、その分野の訳書も多い。④はアイルランド文芸復興を導いた Yeats の著作、⑤はアイルランドの口承伝承の紹介の嚆矢として貴重である[5]。

出版物における誤植、翻訳における誤訳はさして珍しいことではなく、揚げ足をとるような瑣末な指摘はすべきではない。しかし、先にあげた五点が、それぞれに一定の評価を得、信頼のおけるテキストとみなされていることは間違いなく、それゆえに、今後も誤りが再生産されていく可能性が高いこと、また、かつてであれば日本で紹介することそのものに意義があったとしても、情報の流入も人の移動も多い昨今では大きく事情が変わってきていること、そうした現在においても、未だ、日本でアイルランドの昔話やアイルランド語にふれる機会はそれほど多くはなく、二訳書が提供する貴重な機会は無視できないことなどを考え合わせて、長きにわたり誤りが見過ごされ、踏襲されてきた経緯について、広く翻訳、再話における課題として共有すべきではないかと考えた。

また、昔話の語り（story-telling）、すなわち文字を目で読むにとどまらず、声で再現することを念頭におくならば、テキスト上に注釈が加えられたところで、何ら解決されたことにはならない。実際にどのように音声で表現されるべきか、発音やリズム、抑揚、韻律にまで留意する必要があり、それをテキストにどう反映させるかを考えねばならない。その点については課題が多々あり、本稿では意を尽くすことはできないが、それらも含めての問題提起としたい。

2. 問題の所在～石井訳、井村訳における誤りおよび異同

「ノックグラフトンの伝説」は、日本でおなじみの昔話「こぶとり」と構造やプロットが酷似している。妖精が「月曜日、火曜日」と唄っているところへ、背中にこぶのある男ラスモアがやってきて、妖精の歌があまりに単調であったために、妖精の歌に続けて次の曜日を唱えて唄う。すると、妖精はその歌を気に入って、背中のこぶを取ってくれる。次に、また別のこぶのある男ジャックがやってきて、さらに曜日を続けて

唄うと、妖精は歌が台無しになったと怒り、ジャックはこぶを取ってもらうどころか、さらにこぶをつけられてしまうというプロットである。まず、石井訳について、歌が唄われる部分を引用する。

歌のことばは、
「ダ・ルアン、ダ・モルト　ダ・ルアン、ダ・モルト　ダ・ルアン、ダ・モルト（月曜日、火曜日　月曜日、火曜日　月曜日、火曜日）」
というので、そこで、ちょっと休むと、また同じ節がくりかえされるのでした。(269)

そして、ラスモアは、さいしょは、すっかりひきいれられていましたが、おなじ節が、いつまでも、いつまでも、くりかえして歌われるので、しまいには、あきてしまいました。
そこで、「ダ・ルアン、ダ・モルト」が、三度くりかえされて、ちょっと休んだあいだに、自分で、その節にあわせて、「アウガス・ダ・カダイン（それから水曜日）」と、合いの手を入れ、それから、塚の中から聞こえる声といっしょに、「ダ・ルアン、ダ・モルト」と、合唱し、また、休みになると、「アウガス・ダ・カダイン」とやりました。(270)

ジャックは、―― はやくこぶをとりたい一心で ―― 小人たちの歌が、ひと休みするところまでも待ちきれないし、ラスモアがなおしてやった節を、いっそうよくしてやろうなどとも、考えませんでした。そこで、小人たちが、いまのことばを、休まずに七回くりかえしたとき、調子もかまわず、いいあんばいのところへ、いいことばを入れるということなど、すこしも考えず、ラスモアが水曜日を入れたのがよければ、木曜日も入れれば、なおよかろう、ラスモアが服を一着もらったなら、おれは二着だ、という気持ちで、
「アウガス・ダ・カダイン、アウガス・ダ・ヘナ（それから水曜日、それから木曜日）！」
と、どなりました。(274)
〔下線は筆者による〕

石井訳では、「ダ・ルアン、ダ・モルト」→「アウガス・ダ・カダイン」→「アウガス・ダ・ヘナ」と、歌詞が付け足されていく。この片仮名で表記された部分がアイルランド語の音写である。その歌詞に付された日本語は、「月曜日、火曜日」→「それから水曜日」→「それから木曜日」となっている。

ここで、確認のため、アイルランド語で曜日をあらわす語を示しておく。

表１　曜日をあらわすアイルランド語

	English	Irish Gaelic 辞書見出し語	Irish Gaelic (on ~)	【参考】発音[6]
月	Monday	Luan	Dé Luain	ヂェルーン*
火	Tuesday	Máirt	Dé Máirt	ヂェモウルヂ*
水	Wednesday	Céadaoin	Dé Céadaoin	ディケーディン*
木	Thursday	Déardaoin	Déardaoin	ディアルディン*
金	Friday	Aoine	Dé hAoine	ディヒナ*
土	Saturday	Satharn	Dé Sathairn	ヂェサーラン*
日	Sunday	Domhnach	Dé Domhnaigh	ヂェドーナ*

訳語云々以前に、石井訳における「ダ・ルアン、ダ・モルト」、「アウガス・ダ・カダイン」、「アウガス・ダ・ヘナ」といった片仮名表記が、アイルランド語の実際の発音とはかけ離れていることも大いに問題であるといわざるを得ないが、本筋からはずれるため、本稿ではその点には立ち入らない[7]。

ここでの問題は、「アウガス・ダ・ヘナ」に「(それから木曜日)」と日本語訳を付けていることである。「ダ・ヘナ」は、Dé hAoine（ディヒナ*）であるに違いなく、それならば、訳語は「金曜日」でなければならない。「木曜日」とするのは完全に誤りである。石井訳では、片仮名表記されているアイルランド語は、【月曜】、【火曜】、【水曜】の次に、一日とんで【金曜】となっているが、それに対して、訳語は、「月曜日、火曜日、それから水曜日、それから木曜日」と、月曜から順に木曜まで並べられているのである。

石井訳について、アイルランド語の片仮名表記部分と日本語の訳語とで、最後に付加される曜日にずれが生じていることを確認した。次に、該当する箇所を井村訳から引用する。

「月曜（ダルーアン）、火曜日（ダ モ ル ト）、月曜（ダルーアン）、火曜日（ダ モ ル ト）、月曜（ダルーアン）、火曜日（ダ モ ル ト）」
そこでちょっと途切れてから、また同じ旋律が繰り返されるのだった。(96)

そこで、「月曜（ダルーアン）、火曜日（ダ モ ル ト）」と三度唄われたあとでその途切れの間を利用して、同じ調子で「それまた水曜日（アガス・ダダーデイン）」と後を付けた。それから、古墳の中の声に合わせて、「月曜（ダルーアン）、火曜日（ダ モ ル ト）」と唄

いつづけ、再び途切れの間があいたときに、「それまた水曜日（アガス・ダダーディン）」と、この歌の終わりを結んだ。

ジャック・マドンは瘤を取ってもらいたいとしきりに焦っていたので、妖精が唄い終えるのを待つとか、また時機を待ってラズモアより高い声で唄うということなど考えもせず、妖精たちが続けざまに七度も唄うのを耳にすると、その歌の拍子とか調べの気分などおかまいなしに、また、文句のきちんとした入れ場所も考えずに、「それまた水曜日（アガス・ダダーディン）、それまた木曜日（アガス・ダヒナ）」とがなり立てた。(100)

〔下線は筆者による〕

井村訳においては、日本語訳にルビを振る形でアイルランド語の音写が片仮名で示されている。「ダルーアン、ダモルト」→「アガス・ダダーディン」→「アガス・ダヒナ」の順である。アイルランド語の意味は、【月曜】、【火曜】、【木曜】、【金曜】である。先ほどの石井訳では【水曜】だった部分が井村訳では【木曜】となっており、唱えられる曜日が若干異なっていることが分かる。しかし、それにも関わらず、日本語訳としては、石井訳、井村訳ともに、月曜から順に木曜までの順で、まったく同じ訳語があてられている。そのため、井村訳には、石井訳と同じく「ダヒナ」、すなわち Dé hAoine（ディヒナ*＝【金曜】）を「木曜日」とする誤りが見られるだけでなく、さらに、「ダダーディン」、すなわち Déardaoin（ディアルディン*＝【木曜】）」を「水曜日」とする誤りまで生じてしまっているのである。

表 2　石井訳と井村訳の対照表

	妖精の歌	ラスモアによる追加	ジャックによる追加
① 石井訳	ダ・ルアン、 ダ・モルト （月曜日、火曜日）	アウガス・ダ ・カダイン （それから水曜日）	アウガス・ダ ・ヘナ （それから木曜日）
② 井村訳	ダルーアン　ダモルト 月 曜、火曜日	アガス・ダダーディン それまた水曜日	アガス・ダヒナ それまた木曜日
アイルランド語	Dé Luain【月】 Dé Máirt【火】	Dé Céadaoin【水】 or Déardaoin【木】	Dé hAoinc【金】

石井訳と井村訳は、図 1 に示した通り、それぞれ異なる原書から訳出されており、アイルランド語の片仮名表記部分については、唱えられる曜日の並びが異なっているのだが、それにも関わらず、「ダ・ヘナ」もしくは「ダヒナ」（＝【金曜】）を、ともに誤って「木曜日」としている。単純な語訳や誤植であれば、このような事象は生じにくいのではないか。そこで、次に、石井訳、井村訳のそれぞれの原書と、その元となった Croker 版のすべてについて、該当箇所を比較することとする。

3. Yeats 版、Jacobs 版、Croker 版との比較検討

改めて確認しておくと、①石井訳は③Jacobs 版から、②井村訳は④Yeats 版から、それぞれ訳出されていた。また、③Jacobs 版、④Yeats 版は、共に、⑤Croker 版を典拠としている。そこで、③～⑤をすべて確認したところ、Jacobs も Yeats も、⑤Croker 版に手を加えることなく、ほぼそのままの形で自らの昔話集に収めていることが分かった。異同があるとすれば、わずかに、明らかに誤植であろうと思われる箇所や句読点に関してのみである。

石井は「あとがき」で、Jacobs の「昔話集は、イギリスの民族学者たちからは評判がよくないようです。原因は、彼が昔話を、それを語る人びとの口からじかに採集しないで、大英博物館にある記録から掘り起こし、子どもむけに再話したということにあります」(346) と述べ、また、「イェーツの編集した本は、まったく話者の方言をそのまま書きとったものでしたので、私は、その方言をほとんど無視して、私が味わいえたなりに訳するよりほか、しかたがありませんでした」(346-347) と記している。また、Jacobs の昔話集については、専門家から手を加え過ぎているという厳しい批判がなされたことも周知の事実である。しかし、この「ノックグラフトンの伝説」に限っては、Jacobs も Yeats も、Croker のテキストを尊重したもののようで、最小限の修正、編集、印刷の過程で生じたミスなどは別として、意図的に手を加えた形跡はまったく見当たらないと言える。ゆえに、Jacobs も Yeats も、これに関しては再話者とみなすことはできない[8]。

Jacobs 版、Yeats 版、Croker 版は細部にわたって一致度が高いため、前半部分からの引用は割愛し、後半のジャックの部分を示すにとどめる。

③Jacobs 版

Jack Madden, who was in a great hurry to get quit of his hump, never thought of waiting until the fairies had done, or watching for a fit opportunity to raise the tune higher again than Lusmore had; so having heard them sing

it over seven times without stopping, out he bawls, never minding the time, or the humour of the tune, or how he could bring his words in properly, *augus Da Cadine augus Da Hena*, thinking that if one day was good, two were better; and that if Lushmore had one new suit of clothes given him, he should have two. (161−162)

④Yeats 版

Jack Madden, who was in a great hurry to get quit of his bump, never thought of waiting until the fairies had done, or watching for a fit opportunity to raise the tune higher again than Lusmore had; so having heard them sing it over seven times without stopping, out he bawls, never minding the time or the humour of the tune, or how he could bring his words in properly, *augus Da Dardeen, augus Da Hena*, thinking that if one day was good, two were better; and that if Lusmore had one new suit of Clothes given him, he should have two. (44−45)

⑤Croker 版

Jack Madden, who was in a great hurry to get quit of his hump, never thought of waiting until the fairies had done, or watching for a fit opportunity to raise the tune higher again than Lusmore had: so having heard them sing it over seven times without stopping, out he bawls, never minding the time, or the humour of the tune, or how he could bring his words in properly, *augus da Cadine augus Da Hena,** thinking that if one day was good, two was better; and that, if Lushmore had one new suit of clothes given to him he should have two. (25)

〔下線は筆者による〕

一見して、再話や翻案の形跡がないことは明らかである。妖精の歌は、③、④、⑤に共通して「*Da Luan, Da Mort,*【月曜、火曜】」であった。ラスモアとジャックによる追加部分は、③Jacobs 版と⑤Croker 版においては、「*augus da Cadine augus Da Hena*,【そして水曜、そして金曜】」であり、④Yeats 版のみ、「*augus Da Dardeen, augus Da Hena*,【そして木曜、そして金曜】」となっている。このことから、石井訳と井村訳とで唱えられる曜日が異なっていたのは、それぞれ原書に忠実に、綴りから想定される音を片仮名で表わしたためであったと考えられる。

では、③も④も同じく Croker 版を典拠としながら、なぜ、④Yeats 版のみ、「*augus Da Dardeen*【そして木曜】」となっているのだろうか。④Yeats 版には、巻末に NOTES があり、そこに楽譜も掲載されているが、その歌詞もやはり「*Da Dardeen*【木曜】」となっており、誤植の類いではないだろう。今回は納得のいく結論には至らなかったが、検討の余地について後述するとともに、機会があれば、稿を改めて考えてみたい。

ジャックが最後に付け足す曜日は、やはり、③〜⑤に共通して、「*Da Hena*【金曜】」であった。煩雑であるので、ここまでの比較検討結果をまとめて表に示すと、次のようになる。

表 3　石井訳、井村訳と英語原書の対照表

	妖精の歌	ラスモアによる追加	ジャックによる追加
① 石井訳	ダ・ルアン、 ダ・モルト （月曜日、火曜日）	アウガス・ダ ・カダイン （それから水曜日）	アウガス・ダ ・ヘナ （それから木曜日）
② Jacobs 版	*Da Luan,*【月】 *Da Mort,*【火】	augus Da Cadine 【水】	augus Da Hena【金】
③ 井村訳	ダルーアン　ダモルト 月 曜、火曜日	アガス・ダダーデイン それまた水曜日	アガス・ダヒナ それまた木曜日
④ Yeats 版	*Da Luan,*【月】 *Da Mort,*【火】	*augus* *Da Dardeen* 【木】	*augus Da Hena* 【金】
⑤ Croker 版	*Da Luan,*【月】 *Da Mort,*【火】	*augus Da Cadine* 【水】	*augus Da Hena,* 【金】
アイルランド語	Dé Luain【月】 Dé Máirt【火】	Dé Céadaoin【水】 または Déardaoin【木】	Dé hAoine【金】

〔下線および【　】は筆者による〕

アイルランド語の部分は、【月曜】、【火曜】、ついで【水曜】または【木曜】、そして【金曜】である。水曜と木曜のどちらかを一日とばして、最後に金曜日が付け加えられる。しかし、①石井訳も②井村訳も、

日本語の訳語を当てる際に、「月曜日」、「火曜日」、「水曜日」、「木曜日」と、月曜から順に並べており、そのため、アイルランド語の語釈と日本語の訳語とにずれが生じていることが改めて確認できた。このような誤りは単なる誤訳とは思われず、また、偶然に生じたとも考えにくい。このようなずれが生じた原因について、次に検討する。

4. 誤りの原因～Croker 版の注および Yeats 版 Notes

③～⑤の英語版原書について、アイルランド語部分に関する注記や解説がないか確認したところ、子ども向けである③Jacobs 版には、本文にも巻末にも注記等は見当たらなかったが、⑤Croker 版は脚注、④Yeats 版は巻末 NOTES で、それぞれ言及がなされていた。

原書版の注記

⑤Croker 版

【脚注】

*Correctly written, Dia Luain, Dia Mairt, agus Dia Ceadaoine, i.e. Monday, Tuesday, and Wednesday. (22)

*And Wednesday and Thursday. (25)

④Yeats 版

【巻末の NOTES】

The words La〔原文ママ〕 Luan Da Mort agus Da Dardeen are Gaelic for "Monday, Tuesday, and Wednesday too." Da Hena is Thursday. (320)

③Jacobs 版

【記載なし】

〔下線および〔　〕は筆者による〕

⑤、④の記述にはどちらも、アイルランド語の語釈に誤りがあることは、もはや説明の必要はないだろう。最も早い⑤Croker 版の脚注において、「*augus Da Hena*」を「and Thursday」と説明しているのである。後続の英語版、日本語版にこの間違いが引き継がれたことが容易に推測できよう。

④Yeats 版では、③および⑤で「augus Da Cadine」(Dé Céadaoin＝【水曜】) とされていたところが、「*augus Da Dardeen*」(Déardaoin＝【木曜】) に変えられているのだが、それにも関わらず、巻末 NOTES での説明は⑤Croker 版にならってか、「水曜日」とされている。井村訳は、これを忠実に訳して、「Da Dardeen【木曜】」を「水曜日」、「Da Hena【金曜】」を「木曜日」としたのであろう。

これまでのことから、④Yeats 版の訳書である②井村訳が、原書に忠実であったがために誤りを含んでしまったということは容易に推測できるものの、③Jacobs 版の翻訳である①石井訳にまで、同工の誤りがあることについては釈然としない。とはいえ、これまでの検討結果および①石井訳『イギリスとアイルランドの昔話』に Yeats の編著からの翻訳も数編含まれていることなどから、石井が翻訳に際して、④Yeats 版を参照し、読解、翻訳のヒントを得た可能性は大いにありうるのではないか。

5. まとめにかえて～論点の整理と今後の課題

アイルランドの昔話「ノックグラフトンの伝説(*The Legend of Nockgrafton*)」について、日本語訳二点と英語原書三点を比較検討してきた。結果として、アイルランド語に関する誤りは、そもそもの⑤Croker 版の本文および注記にすでに含まれており、それが、アイルランド語に明るくない編訳者の手によって引き継がれてきた可能性が高いことが明らかとなった。しかし④Yeats 版においてのみ、唱えられる曜日が異なる点などについては、検討の余地を残しており、また、新たな論点や課題も見えてきた。そこで、三つの論点に絞って、現段階で考えられる仮説や今後の検討の可能性について述べて、とりあえずのまとめとしたい。

1. Croker 版、Yeats 版にアイルランド語に関する誤りが見られたことについて

Croker 版の注記は単なるミスなのだろうか。Croker の著作は、どの程度信頼がおけるものなのか、Croker はどのような原資料を用いて昔話集を編纂したのか。原資料を調査することは可能だろうか。

また、アイルランド文芸復興の最重要人物であり、アイルランドで過ごした時間も長い Yeats でさえ、このような初歩的な誤りを見過ごしていることについては、危惧を覚えざるを得ない。彼のアイルランド語の知識はいかほどのものであったのか、彼のアイルランドに関する著作にはどの程度信頼がおけるのだろうか。

ここまでくると本稿のテーマを大きく踏み越えてし

まう。今回は資料を渉猟することができず、十分な検討を加えることもできないが、前者 Croker については、著名な民俗学者 Douglas Hyde（1890）が次のような見解を述べており、参考になると思われる。

> The folk−lore of Ireland, like its folk−songs and native literature, remains practically un-exploited and un−gathered. Attempts have been made from time to time during the present century to collect Irish folk−lore, but these attempts, though interesting from a literary point of view, are not always successes from a scientific one. Crofton Croker's delightful book, "Fairy Legends and Traditions of the South of Ireland," first published anonymously in 1825, led the way. All the other books which have been published on the subject have but followed in the footsteps of his; but all have not had the merit of his light style, his pleasant parallels from classic and foreign literature, and his delightful annotations, which touch, after a fascinating manner peculiarly his own, upon all that is of interest in his text. I have written the word "text," but that word conveys the idea of an original to be annotated upon; and Crofton Croker is, alas! too often his own original. There lies his weak point, and there, too, is the defect of all who have followed him. The form in which the stories are told is, of course, Croker's own; but no one who knows anything of fairy lore will suppose that his manipulation of the originals is confined to the form merely. The fact is that he learned the ground−work of his tales from conversations with the Southern peasantry, whom he knew well, and then elaborated this over the midnight oil with great skill and delicacy of touch, in order to give a saleable book, thus spices to the English public.（x−xi）
>
> 〔下線は筆者による〕

曰く、アイルランドの口承伝承の収集は、「科学的な関心」というよりは「文学的な関心」によって行われてきたが、Croker はそれを先導した。彼のテキストは独創的にすぎ、それが彼のテキストの魅力とも弱点ともなっている。イギリスの公衆に売れる本にするために、繊細なタッチ、卓越した技術でテキストに磨きをかけた等々。

この Hyde の言に従うならば、昔話の採集者、再話者としての Croker の評価は微妙なものにならざるを得ない。Croker が具体的に何をどのように創作し改変したのかは、ここからは推測しがたく、さらなる検討が必要である。いずれにせよ、Yeats 版も Croker 版も、その果たしてきた役割や影響の大きさは疑うべくもないが、ただただ尊重するといった態度は非常に危ういものであり、一定の留保のもとで慎重に扱うべきであることは言明できる。また、アイルランドの昔話の受容において、従来、英語圏の情報源に頼り過ぎてきたことの弊害も指摘しておきたい。

2. アイルランド語の曜日の意味について、あるいは、なぜ妖精は喜び怒るのか

⑤Croker 版および③Jacobs 版では、月、火、水、金の順に唱えられていくのに対し、④Yeats 版では、月、火、木、金と、曜日の並びが異なっていることはすでに指摘した通りである。これは、単なるミスなのか、それとも、何か意味があるのだろうか。アイルランドでは、様々なヴァージョンが伝承されているということなのだろうか。また、妖精が水曜または木曜が付け加えられた際には喜び、最後に金曜日が付け加えられた際に怒るのはなぜなのだろうか。

アイルランド語の月曜、火曜はラテン語の Luna、Mars に、土曜日も同じくラテン語の Saturnus に由来している。他のラテン語系統、ゲルマン語系統の諸語とも共通の発想であり疑問はない。それに対して、水曜、木曜、金曜、日曜は、キリスト教の暦に関係した名称である。そのうち、日曜 Domhnach は、ラテン語の Dominus に由来しており、主の日と解すことができる。興味深いのは、水曜 Céadaoin、木曜 Déardaoin、金曜 Aoine である。いずれもラテン語で断食をあらわす ieiunium と関わっており、水曜と金曜は潔斎（断食）日、そして木曜は潔斎（断食）の間という意味である。

このことから、妖精がキリスト教に関係のある曜日、特に、金曜日を忌避した可能性は考えられないだろうか。それならば、Yeats 版のように、月、火、木、金と唱えていく方がより妥当ではないかとも思われる。しかし、類話を多数参照してみなければ、このような解釈に立ち入っての即断はできない。また、ある時点で文字化され固定されたテキストの読解のみにとどま

らず、その後も途切れずに続いてきた生きた語りのうちに答えを探る必要もあるかもしれない。

筆者は、本稿執筆の過程で、伝統歌唱や昔話の伝承者として高く評価される Seosamh Ó hÉanaí（Joe Heaney, 1919−1984）、現代の語り部として活躍するエディ・レニハン（Eddy Lenihan）両氏の語りの音声資料を入手し利用することができた。どちらも「Two Hunchbacks」と題する類話を語っている。その音声資料を試聴したところ、さらに別の観点からの考察が必要ではないかとの考えに至った。これまで比較検討してきた英語版、日本語翻訳版の五点については、そもそも原書を同じくしており、内容が一致していた。妖精が怒ってジャックにこぶをつけた場面についても、当然、語りの内容にも語り口にも揺れがない。しかし、音声資料を聴いてみると、今回検討した文字資料とは、語りの内容や焦点の当て方が微妙に異なっていたのである。

音声資料では、ジャックに該当する人物は、妖精の歌に続けて、「木曜日、金曜日、土曜日、日曜日」と一気に唱えている。ゆえに、これらの語りにおいては、曜日の意味合いが問題とされているわけではないだろう。このことから、単なる訳語の訂正にとどまらず、この昔話が一体何を語ろうとするものなのか、どこに焦点があり、どのような面白さがあるのかを検討し直して、改めて再話する必要があるだろう。この点については、残りの紙幅で十分追求することは難しい。そのため、当初は本稿に音声資料の検討も含める予定であったが、いずれ稿を改めて論ずることとしたい。

3. より正確で分かりやすく、語り唄うことのできる再話とは

本稿では、度々の再話、翻訳、編集作業を経てなお、アイルランド語に関する非常に初歩的な誤りが再生産されてきた過程を明らかにすることができた。誤りが原書に由来するものである限り、日本語訳書に修正を加えることは難しいだろう。残念ながら、日本の読者は、アイルランド語にふれる貴重な機会に間違った情報を手にするほかないのである。信頼の高い出版物において、このような誤りが再生産され続けている現状は看過できるものではない。

殊に、石井訳は、子ども向けの本でもあり、基本図書でもある。長年にわたり、多数の語り手が、実際にこのテキストをそのまま覚え、公共の場で子どもに語ってきたであろうことは想像に難くない。筆者も、この話を自らのレパートリーとしている語り手や、妖精の唄う曜日の歌を唱えるだけでは飽き足らず、テキストに添えられた楽譜を頼りに、音楽や伴奏を入れて語り唄う方が実際におられることを聞き及んでいる。

歌と音楽については、訳語の誤りといった些細な問題に比べるとさらに厄介であり深刻である。テキストに添えられた楽譜を見れば、そのリズムが、アイルランドの伝統音楽では「ジグ（jig）」[9] に分類されるものであることが分かる。しかし、アイルランド語を解さないどころか、ほとんど耳にしたこともないであろう日本人の語り手が実際の発音とはかけ離れた片仮名表記をそのまま読んで唄ったものは、アイルランド語ともアイルランドの音楽とも似ても似つかない、あまりに単調かつ奇妙なもので、筆者は一聴して強烈な違和感を覚えた。

昔話の語りと歌や音楽は、耳で聴くことによって享受される伝承文化というだけでなく、演じられることによってある瞬間に現出して一瞬にして消えていく一過性のものでありながら、永遠とも思われる時間感覚を宿して、過去と未来を結びつけるメディアという意味で同根である。殊にアイルランドの伝承文化においては、語りと歌は非常に密接なつながりを持っていると認識されており、アイルランドの伝統歌唱や伝統音楽は、実際にアイルランド語とのつながりから生まれた独特の節回しやリズムを保持している[10]。そしてまた、アイルランドの昔話も歌や音楽も、過去の遺物などではなく、今まさに行われつつある生きた伝承なのである。

実際、先に挙げた音声資料二種における語り唄いは、今回比較した文字資料に付された楽譜とは言葉も旋律も異なっていながら、どちらにも確かに「ジグ（jig）」のリズムが内包されていた。このようなアイルランドの伝承文化をふまえず、表面をなぞるだけの語り唄いによって、まるで別物に変容させてしまうことの損失や弊害は計り知れない。

日本語には日本語特有の音韻、リズム、韻律があり、当然のことながら、それらは日本の伝統音楽と結びついている。アイルランド語やアイルランド音楽の音やリズムが再現できないのであれば、むしろ思い切ってすべて日本語に変え、日本語のリズムに合う日本の伝統的なわらべうたの節にのせて唄う方が、より理にかなっており有意義であるかもしれない。このようなことは、もっと幅広く議論されてもよいと思われるし、語り手を志すすべての人に共有され、より深い理解が醸成されていくべきであると思われる。

昔話は元来語られるものであり、語りのテキストは、

当然、音声化されることを前提とされなければならない。原書に由来する誤りを正すことはできるのか、より正確で語りやすい翻訳、再話は可能か、アイルランド語にどのような訳語をあて、どのような片仮名表記をするべきかといった問題は、常に、どのように語るのかという問題とからめて、最終的な音声表現の形態を目指しながら解決を図っていくことが望ましい。歌が付随する「ノックグラフトンの伝説（*The Legend of Nockgrafton*）」については、翻訳の正確さや再話の文体の語りやすさはもとより、どのように語り唄えばよいかといった観点から、語り手にとって有益な情報や示唆が得られるような工夫も求められるだろう。

以上、三つの論点にしぼって述べてきたが、神村（2016）でも提起した通り、アイルランドの昔話の日本における翻訳、紹介には様々な難点や課題がある。本稿では、「ノックグラフトンの伝説（*The Legend of Nockgrafton*）」一話のみを比較検討したが、他の話についても、あるいは他の翻訳や再話についても、原資料、文字資料、音声資料などの、幅広く類話も含めた検討と精査が必要であるだろう。今後もさらに資料の収集および比較検討を進め、昔話の伝承の背景を掘り下げながら、よりよい翻訳、再話のあり方を探ってゆきたい。

註

1　英語圏では、「Two Hunchbacks」としても知られている昔話である。石井桃子編訳『イギリスとアイルランドの昔話』においては「ノックグラフトンの昔話」、W. B. イエイツ編、井村君江訳『ケルト妖精物語』では「ノックグラフトンの伝説」と訳されているが、訳題を一々示すと煩雑になるほか、「legend」が一般に「伝説」と訳され、伝説（legend）と昔話（folk-tale or fairy tale）は同じく口承文芸の一種でありながら、語る内容や形式が異なることから、本稿では、「ノックグラフトンの伝説」をとり、訳書の別については、その都度、「石井訳」、「井村訳」として明示することとする。

2　今回比較検討したテキストは、図書館所蔵の資料やインターネットの web 上で公開されている資料などを適宜利用し、それぞれ複数の版を参照した。該当箇所を確認することが目的であったため、特に初版に限ることはせず、すべてを網羅することもしていない。その点、行き届いた調査とはいえないことをお断りしておく。ただし、インターネットの web 上で公開されている資料についても、テキストデータのみではなく、必ず、書影が確認でき、出版年が明らかなものを用いた。

3　石井桃子による「あとがき」の以下の記述による。

> アイルランド（ケルト系）のお話では、「元気な仕立屋」「どろぼうの名人」「ノックグラフトンの昔話」「大男フィン・マカウル」を、ジェイコブズの “Celtic Fairy Tales”（一八九四年）から、「たまごのカラの酒つくり」「白いマス」「主人と家来」を、アイルランド生まれの詩人、ウィリアム・バトラー・イェーツ（William Butler Yeats 1865－1939）編の “Irish Folk Stories and Fairy Tales” から採りました。イェーツの本は、子どもを考慮に入れずに、文字のない人々から直接聞き取ったお話を編纂したものです。（344-345）

4　近年の大きな成果として、石井桃子の翻訳文体についての竹内（2014）の論考がある。創作児童文学の翻訳を主たる対象としているため、昔話の翻訳についてはほとんど紙幅が割かれていないが、石井が Jacobs の昔話集などを高く評価し、創作児童文学の翻訳に際して、それらの昔話の語り口に学びながら文体を練り上げていったことが指摘されており、示唆に富む。

Jacobs の昔話集に対する石井の評価は、石井（2014）からもうかがい知ることができる。

5　井村君江は、優れた翻訳者であるとともに、日本では妖精学、ケルト神話、アーサー伝説等の紹介、研究のパイオニアである。詩人、劇作家のイェイツはケルト文芸復興の中心人物として、アイルランドの文化、文芸の紹介や新たな創造の中核となった。Croker の著作は、アイルランドの昔話の英語圏への紹介の嚆矢であり、グリム兄弟の目にとまってドイツ語に翻訳された事実からも、その意義が確かめられるだろう。

6　アイルランド語は、話されている地域ごとの発音の違いが非常に大きく、アイルランドにおいてすら標準となる発音が定められていない。また、アイルランド語の音韻は日本語の音韻とはかけ離れており、片仮名で表記することはまず不可能であるといってよい。本稿では、比較を容易にするために、筆者なりにより原発音に近いと思われる片

仮名表記を示すこととした（語末に*印を入れて示した）が、あくまで便宜上のものであり、実際の発音通りではないことをお断りしておく。

石井訳、井村訳ともに、アイルランド語の片仮名表記部分は、程度の差はあれ、実際のアイルランド語の発音とはかなり異なっており、そのこと自体も大いに問題である。しかし、原発音を尊重するとしても、日本語で書かれ、日本で出版される書物について、どのように表記すべきかについては容易に見定めがたいところがある。この点については註 7 をも参照のこと。

7　註 6 にも示した通り、アイルランド語の発音の扱いには難しい点がある。アイルランド語詩、アイルランド語文学の専門家であり翻訳者でもある荒木孝子氏によれば、最近、日本のアイルランド語やアイルランド文学の専門家の間で、アイルランド語の片仮名表記に一定のルールを作ろうという動きが出ているとのこと。

8　再話者としての Jacobs については、藤本朝巳による「Joseph Jacobs の再話意図」等、一連の論考がある。また、「英国のフェアリーテールの翻訳に関する諸問題と今後の課題」（2015）では、Yeats についても多少ふれている。しかし、本稿では、再話者としての Jacobs や Yeats については深く立ち入らない。

ただし、従来、「再話者」とみなされてきた Jacobs が序文などで主張し、ほのめかしていることとは裏腹に、あるいは Jacobs の「再話」や「翻案」に向けられた過去の様々な批判をも裏切って、「まったく再話をしていない」場合があることのみ指摘しておきたい。

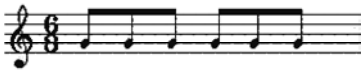
従来、児童文学研究者や図書館関係の実践家は、再話者としての Jacobs を擁護することに傾注してきたきらいがあり、再話していない場合についての言及はあまりなされてこなかったのではないだろうか。しかし、再話者としての Jacobs を考える上で、あるいは Yeats のアイルランドに関する著作について改めて考える上で、このような事例は看過できないものと考える。

また、Jacobs も Yeats も手を加えなかったという事実に照らせば、Croker 版の重要性はいよいよ高まる。後述するような Hyde（1890）による批判はあれ、当時としては類のない貴重な企てであって、これに匹敵する資料が見当たらない（がゆえに、Yeats も Jacobs も修正することができなかったのではないかとも推測しうる）Croker の昔話集については、慎重な取り扱いが求められる。アイルランド本国や英語圏における資料収集や研究の蓄積に学びながら、様々な文字資料、音声資料と比較して、Croker がどの程度、翻案や創作を行ったのかを検証していくことが重要な課題となるだろう。

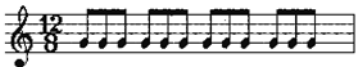
9　アイルランドの伝統音楽における器楽曲の多くはダンスと結びついており、リズムによって大別される。ジグ（Jig）は、8 分の 6 拍子、8 分の 9 拍子、8 分の 12 拍子の曲である。

8 分の 6 拍子＜譜例 1＞は大きく 2 拍、8 分の 12 拍子＜譜例 2＞は大きく 4 拍で拍子をとりながら、その 1 拍の中に三拍子を感じるいわゆる複合拍子である。演奏される際には三つを均等に刻むわけではなく、三拍のどの拍を強調するかには地域性が見られる。日本の音楽に見られる単純な二拍子、四拍子とも、またワルツなどの三拍子とも、リズム感、グルーヴ感が相当に異なる。

＜譜例 1＞8 分の 6 拍子



＜譜例 2＞8 分の 12 拍子



10　アイルランドの伝承文化における物語と歌、アイルランド語の密接な関わりについては、菱川（2016）に詳しい。本書はアイルランドの伝統歌唱およびその伝承者である Seosamh Ó hÉanaí（Joe Heaney）に関して、日本語で読めるおそらく唯一の専門書である。

引用・参考文献

Croker, T. Crofton.（1844）*Fairy Legends and Traditions of the South of Ireland.* A New Edition. Philadelphia: Lea and Blanchard.

ブリアー，ダイアナ（2001）『アイルランド音楽入門』音楽之友社.

藤本朝巳（2006）「English Fairy Tales の出版経緯と再話：Joseph Jacobs の再話意図（2）」『フェリス女学院大学文学部紀要 41 号』フェリス女学院大学，pp. 41−60.

藤本朝巳（2007）「Celtic Fairy Tales 出版のねらい：

Joseph Jacobs の再話研究」『フェリス女学院大学文学部紀要 42 号』フェリス女学院大学, pp. 1−21.
藤本朝巳（2011）「More English Fairy Tales 出版の意図：フェアリーテールの再話とその意図（3）」『フェリス女学院大学文学部紀要 46 号』フェリス女学院大学, pp. 221−252.
藤本朝巳（2015）「英国のフェアリーテールの翻訳に関する諸問題と今後の課題」『フェリス女学院大学文学部紀要 50 号』フェリス女学院大学, pp. 115−130.
Hatao（畑山智明）（2008）『地球の音色　ティン・ホイッスル編：はじめてふれる世界の楽器』有限会社プロキオン・スタジオ.
菱川英一（2016）『シャン・ノース　秘密の唱法：ジョー・ヒーニの場合』Stiúideo Gaeilge.
Hyde, Douglas. Edited, translated, and annotated.（1890）*Beside the Fire: A collection of Irish Gaelic Folk Stories*. London: STRAND.
石井桃子編訳（2002）『イギリスとアイルランドの昔話』福音館書店（福音館文庫）.
石井桃子（2014）「ジェイコブズ『イングリッシュ・フェアリー・テールズ』」『プーと私』河出書房（初出『民話』未來社，1959）.
Jacobs, Joseph.（1895）*More Celtic fairy tales*. New York: Putnam.
ジェイコブズ，ジョーゼフ編，山本史郎訳（1999）『ケルト妖精物語Ⅰ』原書房.
ジェイコブズ，ジョーゼフ編，山本史郎訳（1999）『ケルト妖精物語Ⅱ』原書房.
神村朋佳（2014）「語るための再話を考える：翻訳テキストの比較から」『子ども研究 vol. 5』大阪樟蔭女子大学附属子ども研究所, pp. 21−30.
神村朋佳（2016）「（研究ノート）語るための再話を考える：「ジェミー・フリールと若い娘」の再話を通して」『子ども研究 vol. 7』大阪樟蔭女子大学附属子ども研究所，pp. 40−44.
レニハン，エディ収集・解説，カンジュウロウ，キャロリン・イヴ編，フューシャ訳（2015）『異界のものたちと出遭って』アイルランドフューシャ奈良書店.
竹内美紀（2014）『石井桃子の翻訳はなぜ子どもをひきつけるのか』ミネルヴァ書房.
山田正章（1980）「“SING THE PEASANTRY”：Yeats の Irish Background について」『英文學研究』57(2), 日本英文学会, pp. 157−173.
Yeats, W. B. edited and selected.（1888）*Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry*, New York: The Walter Scott Publishing Co., Ltd.
イェイツ，W. B. 編，井村君江編訳（1986）『ケルト妖精物語』ちくま書房（ちくま文庫）.
Zipes, Jack, ed.（2015）*The Oxford Companion to Fairy Tales*. Oxford: Oxford UP.
Collins Irish School Dictionary.（2011）Glasgow GB: HarperCollins Publishers.

音声・映像資料

・エディ・レニハン（Eddie Lenihan）の語り
「アイルランドと奈良の民話語りフェスティバル」（2016 年 2 月）など（荒木孝子氏提供）
・Seosamh Ó hÉanaí（AKA Joe Éinniú or Joe Heaney）の語り
“Seosamh Ó hÉanaí: Na Cartlanna” http://www.joeheaney.org/

謝辞

本稿の執筆にあたって、アイルランド語詩、アイルランド語文学の専門家、翻訳家の荒木孝子氏に多大な助言や励ましをいただき、様々な資料の提供を受けることができた。

特に、荒木孝子氏が、現代アイルランドの優れた語り手エディ・レニハン氏の日本への招聘に尽力されたご本人であったこと、そして、エディ・レニハン氏の語りをそのままおさめた音声資料や映像資料を快く提供して下さったことは、望外の幸運であった。

神戸大学の菱川英一先生には、これまた幸いなことに本稿の締め切り間際に、アイルランドの伝統歌唱に関するご著書についてのご教示をいただいた。

ここに記して心より感謝を申し上げる。

（ただし、本稿についての責任はすべて筆者に帰するものである。）

Translating and Retelling Irish Fairy Tales: Through the Comparison of Two Japanese Translations with Three English Versions of *"The Legend of Nockgrafton"*

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences
Tomoka KAMIMURA

Abstract

I examine a way of translation and retelling of Irish fairy tales to make more accurate translations that are not only suitable for storytelling but readable for Japanese children.

In this paper I compared texts of the two Japanese translations with the three English versions of "The legend of Nockgrafton", because there were errors about Irish Gaelic in two Japanese translations. Although these five texts had been evaluated highly, it was found that similar errors were included in all of these five versions. It was suggested from the result that the earliest version of Croker's will be causing these errors.

Further, in consideration of the oral tradition in Ireland I would like to collect both literary texts and audio data of Irish famous storytellers and to examine variants of the fairy tale more widely.

Keywords: fairy-tale, Irish Gaelic, translation or retelling, story-telling, oral tradition